

神明宮の采



能見神明宮

発刊のことば

毎年、風薫る五月に行われる神明宮の大祭は、菅生神社、岡崎天満宮の祭礼と共に岡崎の三大祭りのひとつで、「神明さん」と呼ばれ多くの人々に親しまれています。

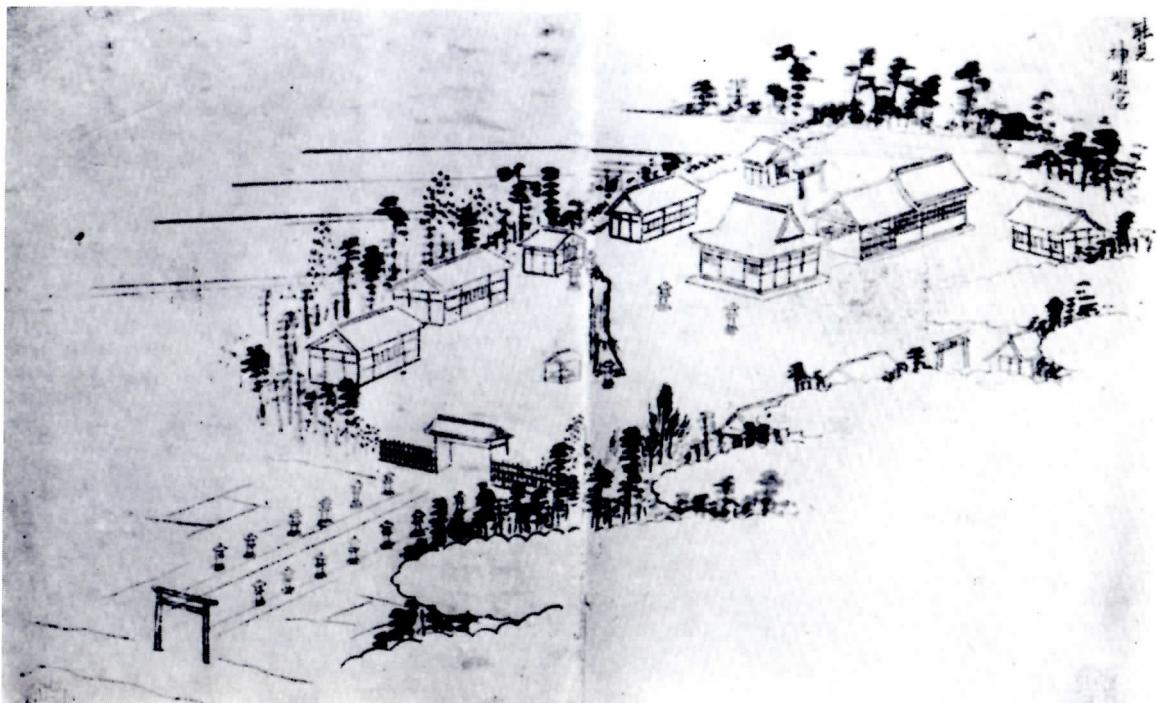
古い伝統を今に伝えるこの祭礼は、岡崎市観光文化百選のひとつでもあり、昭和六十一年度には岡崎市教育文化賞を受賞している誇るべきお祭りです。

この小冊子は、地域の氏神である神明宮と伝統ある大祭について、より一層親しんでいただくよう作りました。

岡崎市元能見町

神明宮

平成六年五月



旧『岡崎市史』より転写

神明宮の由来

神明宮がいつからこの地にまつられるようになったかは定かではありませんが、大正年間に発行された旧『岡崎市史』には「伝承によると、もと材木町字久後（現在の一丁目三番地）にあつた稻前神社を、天正十

八年（一五九〇）、田中吉政が岡崎城主になつて城地拡大に伴いこの地に移転再興したもの」と書かれています。

また、同じく旧市史には、天正二十年（一五九二）に神官の深見六藏氏が田中吉政の家老辻勘兵衛より禰宣屋敷を寄進されたとあり、その「寄進状」の写真が掲載されています。

寛延二年（一七四九）、社殿を再建し、遷宮式を行っています。明治五年に村社となり、明治四十二年には拝殿が改築され、大正十三年には境内の御鍬社、津島社、厳島社、稻荷社などを合併し、神殿、渡り殿、神楽殿、社務所、石鳥居などが建立されています。

祭神は皇大神宮（天照大神）、豊受大神宮（豊受姫命）須佐之男命、五十猛命、市杵島姫命の五座です。

なお、旧市史には『参河名勝志』から引用した次のような伝承も書かれています。

「神明宮 西能見村に在り 神領三石

昔日、源頼義公の家臣に嵩地源太夫広長という者あり、能見の郷を開き一神祠を建立すると云う、其後加藤新蔵、鈴木市蔵、近藤九兵衛なる者は皆、村中累代の旧家なれば、相共に評議して御神体を改め、神明を勧請せしとぞ、承久の頃（一二二〇年頃）は星野判官額田郡の知たり：（後略）：

この外、『社寺旧記』や『能見村根元之事』には、鎌倉時代の源頼家の代に疫病封じのため、能見村の加藤新蔵、鈴木市蔵らが神明を勧請したという由来が伝えられています。

神明宮の氏子

現在、神明宮の氏子は次の十二ヵ町で、
区域は図のとおりです。

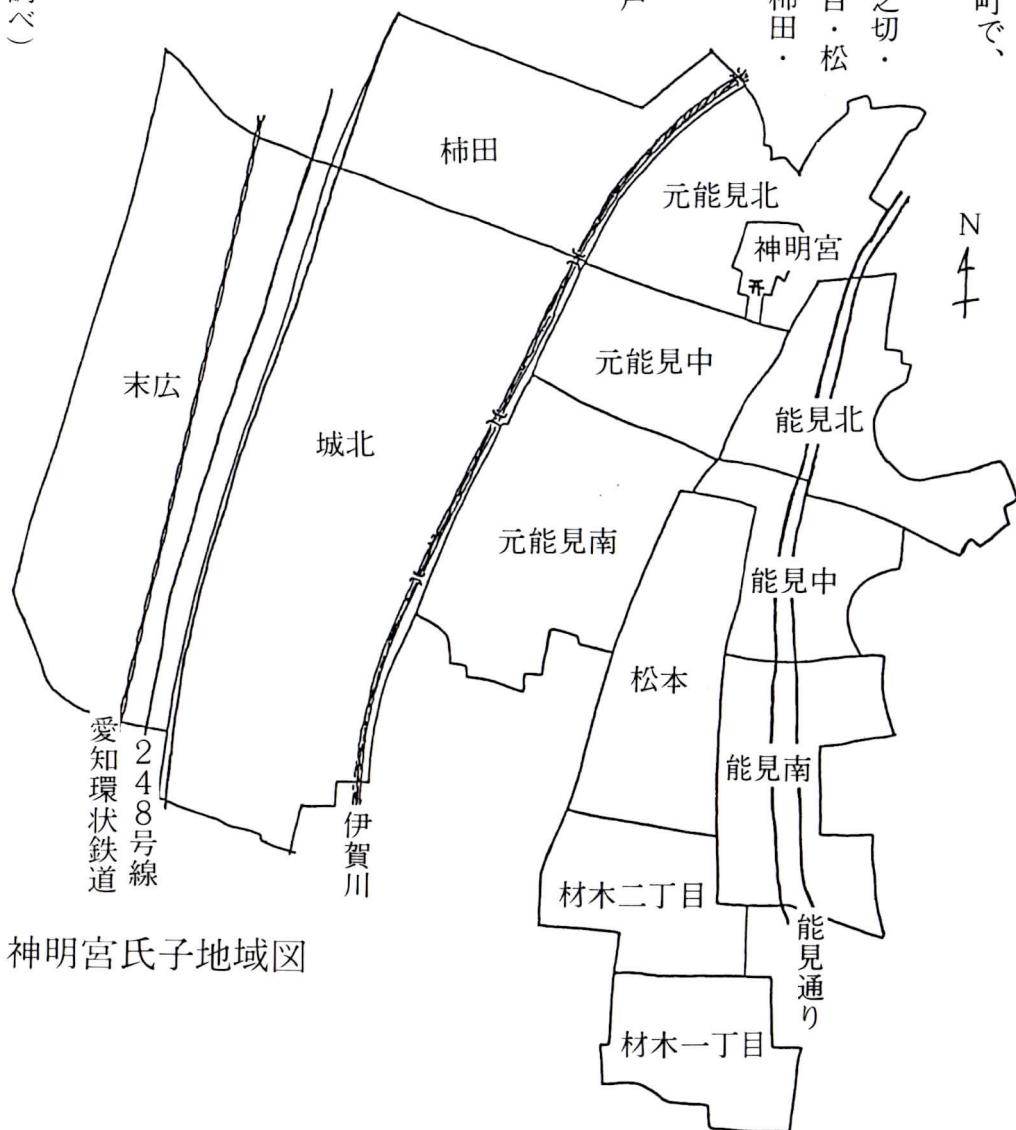
元能見北町・能見北之切・能見中之切・
能見南之切・材木一丁目・材木二丁目・松

末広（献饌順）

人口

一五二戸

元能見北町	能見北之切	二九七
能見中之切	一八四	四五八人
能見南之切	二五八	四三
材木一丁目	二五八	六九
材木二丁目	二六〇	九二
松本	四八五	一五
元能見南町	四三六	一四八
元能見中町	六二九	二三九
元能見北町	五二三	一八三
柿田北	三〇二	二三三
城末廣	七一六	二三二
(平成五年三月三十一日現在・各町		



町名の由来

能見（のみ）：能見三町

元能見三町

岡崎城の北、外堀の外側に位置する一帯は、古くから能見ヶ原と称されていました。

『能見村根元之事』には、十二世紀のころ、矢作の里の兼高長者がこの辺りで月に六度の能狂言を催したところから「能見村」と名付けられたと伝えられています。能見村はその後、村の東側が能見町となり岡崎宿中に入ると、これに対し、能見村を西能見とも呼びました。現在の元能見町です。

材木（ざいもく）：材木二町
『参河国名勝志』には昔は稻前神社の社地で、巨木が鬱蒼とした深林であったが、城市を開くにあたって、これを伐採し、柱や板に

して売ったところから、「材木町」の名が付いたとあり、別名「木町」（きまち）とも呼ばれました。

城北（じょうほく）：城北
柿田（かきた）：柿田

末広（すえひろ）：末広

松本（まつもと）：松本
松本の町名の起こりは、明治五年二月のことです。

天文十八年三月、岡崎城主松平

広忠が家臣に殺害され、その遺体が能見ヶ原の月光庵（現松庵寺）に埋葬されました。子の竹千代（家康）は墓の上に小松を植え、松平家の繁栄を祈念しました。永禄三年（一五六〇）、家康はこの地に父の菩提の寺を建て、自分が植えた松がよく繁っているのを見て、我が祈念に応ずる松だ、ということ

で寺の名を松庵寺としました。この故事から、広忠公の墓上の松の本の町ということで「松本町」と付けられました。（参考：『松本町百年祭記念 まつもと』）

「元能見西」として氏子の一つであつたが、区画整理により昭和五十一年四月一日よりこの新しい町名を名乗ることになりました。

「城北」は岡崎城の北部に位置し、町内に城北中学があることからも名付けられました。

「柿田」は町内を流れる柿田川町で今後の発展を願い、目出度いこの名を付けたものです。

神明さん（神明宮大祭）の歴史

毎年五月第二土、日曜に行われる神明宮の大祭は、「神明さん」と呼ばれ、親しまれています。この祭り

の起源については、残念ながらはつきりとしていません
のではないでしょうか）

んが、少なくとも江戸時代中期に始まつたものと思われるこの祭りの変遷をさぐつてみましょう。

◎ 承久のころ（一二二〇年ころ）

「本社ができ、祭礼は初め八月十五日夜より十六日まで、氏子が集まって御神酒を供え、樂を上げて祭りをした。」（中略）「その後、祭礼は水無月にした」（『能見村根元之事』：江戸末期に書き写した文書で原本の時代は不明）

◎ 明治二十年代
この当時、神明宮の祭礼は旧六月十五、十六の両日と秋の旧九月十五、十六日に執り行われました。

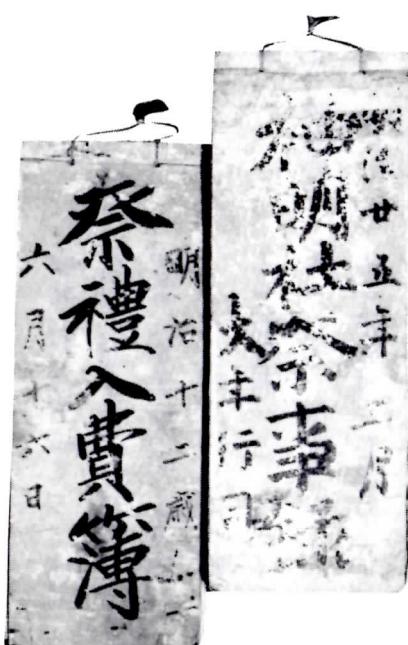
◎ 明治二十年代

明治二十年（一八八七）より、春の旧四月十五、十六日に変更された。秋は変わり無し。

二十七、八年ころまで秋祭りにも、打ち上げ花火や手筒花火その他いろいろな余興が盛大に行われていました。

◎ 江戸時代中期（一七五〇年ころ）

「例祭六月十五日なり、山車両輦出す、氏子町中を引きわたす、童児の舞などあり、美觀云わん方なし」（『参河名勝志』：いつごろ書かれたものか不明だが、江戸時代後期のものと思われます。社殿が再建された寛延二年（一七四九）ころから始まつた



明治時代の祭礼の記録

◎ 明治四十年代

四十一年、明治天皇より幣白料御下附につき、当日勅使を迎えるにあたつて、この年より祭礼を新暦五月十五、十六の両日に行うこととしました。

四十二年、松本町の山車（二階建塗り仕上げ）が売り扱われました。（このころまで二階建の山車が引き回されたのでしょうか？）

明治時代には山車は毎年出たのでなく、年によつて山車も出るが、花火もあつたり、芝居やら手踊りがあるということで、各町が競つて多彩に催されたようです。特にこの当時は、町民有志による素人芝居に関心があつたようです。この素人芝居は大正を経て、昭和八、九年ころまで続いたようです。（現在、境内にある小屋の設備は当時の名残です）

◎ 大正時代

大正四年、松本町では総檜白木造りの山車が新造されました。（昭和三十四年まで引き回されました）



明治末期か大正初期の大祭風景

◎ 昭和初期～終戦

この当時、祭礼の日には氏子の小学生は学校を休むことができ、他の同級生からうらやまれたそうです。御神輿渡御（おみこしとぎよ）が通る道筋の家には、家紋の入った青と白の幕が張られ、祭り気分を引き立てました。また、二階以上の高い所からの見物は禁止されていたとのことです。（材木二丁目 水谷成人氏のお話）

昭和七、八年ころの松本の山車の引き回しは、お囃子は消防団が、踊りは町内の舞妓の出演で賑やかに行われました。しかし、この山車の引き回しも、戦争の拡大により、昭和十一年を最後に中断されました。

◎ 終戦～現在

昭和二十三年の祭礼に、松本と能見の二台の樽みこしが出ました。

二十七年、山車の引き回しを十六年振りに復活。

氏子地域内に止まらず板屋町、康生、伝馬地区まで引き回しをしました。

この当時、本格的な山車を持たない町内では、俗にいう「底抜け屋台」を引き回しました。

昭和三十三～五年にかけて、元能見南、能見北、松本が山車を新造しています。

四十一年、奉駕者の不足から御神輿を小型トラックに載せることとし、馬に乗っていた神官も乗用車に乗ることにしました。

四十九年、人夫に頼っていた「白丁衣」を厄年会で奉仕するようになりました。

五十一年、元能見西が城北、柿田、末広に分離しましたが、五十三年までを独立猶予期間とし、四四年に完全独立しました。

五十三年より前日祭に境内で手筒花火を奉納。五十四年、トラックによる御神輿の運行を新製した御神輿台車での運行に変更。

この年より城北、柿田のお旅所への巡回開始。五十七年より末広のお旅所への巡回開始。

五十八年の祭礼より従来の「大年番制」を改め、「当番制」へと移行しました。

（本稿作成については、前掲『まつもと』及び末広町の加藤廣治氏の思い出を参考にしました）

なお、「能見東」・「福寿」・「西材木」の三町が神明宮の氏子であった時期もあるので、ここに紹介しておきます。

御神輿渡御

お

み

こし

と

ぎょ

長い間の時の流れの中につけて、ほとんど昔のかたち通りに行われているのが、神明宮大祭です。

なかでも、この御神輿渡御は神明宮の御神体（天照大神）が御神輿に移され、先獅子を先頭に長い行列を組み、各町内に設けられた御旅所（おたびしょ）を巡行し、それぞれの町の安全を願い、お祓いを受けるものです。

こうした昔ながらの祭礼風景を今に残す祭りは少なく、山車の引き回しと共に神明宮大祭のみどころとなっています。また、伝統的な祭りということで昭和六十一年度の岡崎市教育文化賞を受賞しています。

御神輿渡御（普通は渡御と略して呼ばれることが多い）の行列配置は十二・十三頁のイラストをご覧ください。

渡御の各役割は各町や厄年会で分担されますが、選ばれたひとびとは、その役への誇りと共に、良き思い出としていつまでも持ち続けることでしょう。

祭りを見る皆さんも山車の華やかさにだけ眼を向くないで、渡御の厳肅な雰囲気も味わってください。



御神輿車



能見通りを行く御神輿渡御の列



御旅所での町内安全
を願うお祓い風景

山車と宮入り

御神輿渡御が大祭の静の象徴であるならば、山車は動の象徴といえるでしょう。

山車はその地方によつて、屋台（やたい……高山）、山車（だし：愛知県各地）、鉢（ほこ……京都）、壇尻（だんじり……長崎）、樂車（がくしゃ）、花車（はなぐるま）など、さまざまな呼び名があります。

神明宮の山車は、「だし」と呼ぶのが正式と思われますが、通常「やまぐるま」と呼び慣（なら）されています。

現在、神明宮の氏子には八台の山車があり、いずれも趣きのある山車です。この山車も明治時代のころまでは、二層式、三層式（二階、三階建て）の山車が引き回されていましたが、電線が引かれる

などの道路事情により、現在の山車へ改造されたり、新造されました。

また、戦後、山車の引き回しが復活された時期に、本格的な山車が造れず、床が無く、囃子連も一緒に歩く通称「底抜け屋台」というものを引き回した町内があるのを覚えているかたもあるでしょう。

今では多くの山車に舵取りのための装置が付けられ、方向転換が楽になりましたが、中には車輪が固定式のものも残っています。引き手と梶方が呼吸を合わせ、一気に向きを換える姿はなかなか勇壮なものですね。

大祭では、各町の特色を表した法被（はっぴ）やゆかた姿も勇ましい大人や子供の手によつてそれぞれの町を引き回されます。そし



能見南之切



能見中之切



能見北之切



元能見北・城北・柿田

て、各所で止めては、舞台をせり出し、可愛らしくもあでやかな手踊りが披露されます。

車中では、これまた、各町それぞれ自慢のお囃子がにぎやかに演奏され、祭り気分をいやがうえにも盛り上ります。

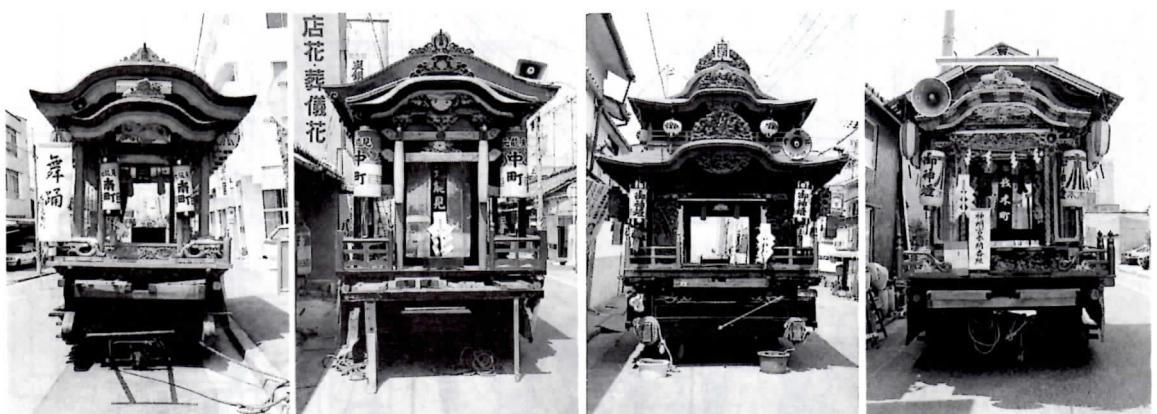
祭りのクライマックスは宮入りです。夕刻、午後七時になると一

カ所に集まつた八台全ての山車にいつせいに灯がともりスタートです。各町独自のお囃子が流れ、大人も子供も全員で山車を引き、神明宮に向かいいます。この時、祭りは最高潮に達します。

夕闇の中を提灯に包まれた山車が進む様子はさながら光の祭典といつてよいでしょう。



宮入りは祭りのクライマックス



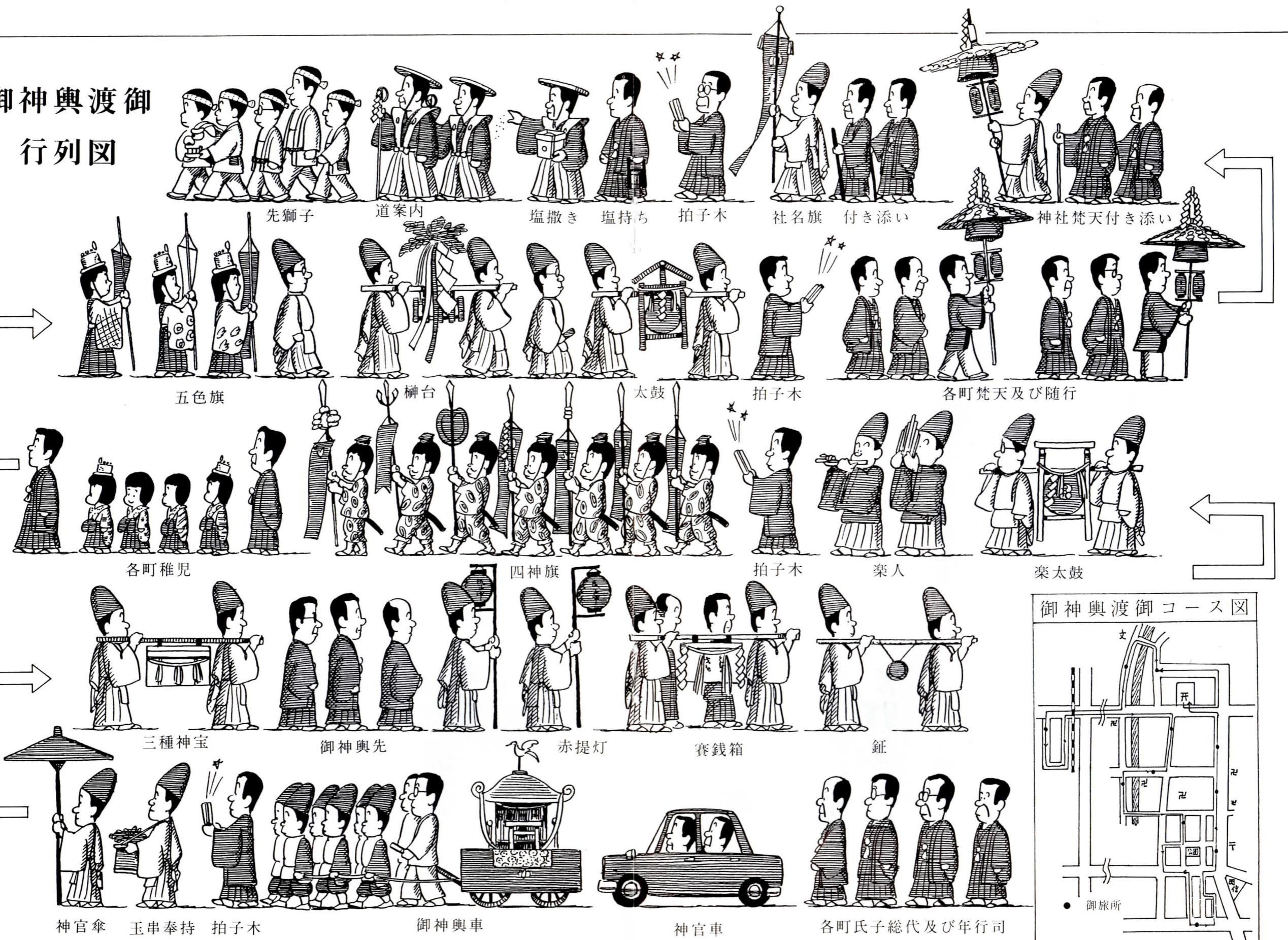
元能見南

元能見中

松 本

材木二丁目

御神輿渡御 行列図



踊りとお囃子

はやし

なると、祭りのための練習が始まります。



山車の上で踊る子供

さて、本番の日、舞台の横では我が子の晴れ姿を心配そうに見守る母親の姿が見られます。踊る子には町内の人々から暖かい拍手と「はな」と呼ばれる御祝儀が投げられます。

時々は間違えたりしますが、きれいな着物を身に付けて子供たちは誇りに満ちています。

お囃子もまた大祭になくてはならぬもののひとつです。

踊りとお囃しは大祭を盛り上げる大切な部分のひとつです。

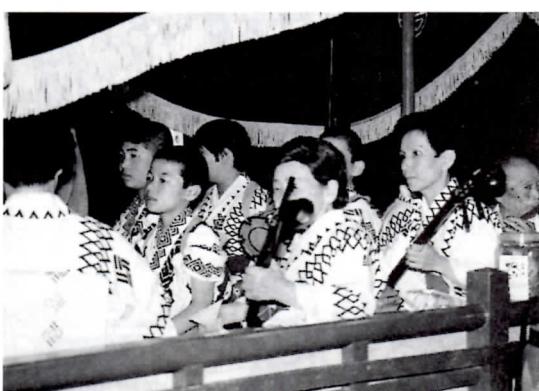
山車の舞台で子供たち（時には大人の踊りもあります）が一生懸命に踊る姿は、とても可愛いものです。

踊り手は小さい子では三歳位の子が加わり、特に舞踊を習つていい子とは限りません。四月下旬に

踊りと同様、四月下旬から練習

が始まります。

昔は町内の青年が中心になつて演奏をしていましたが、サラリーマンが増えてきた現在では、子供によるお囃子も多くなってきました。各町独特の昔から伝わるお囃子を大人から子供へと、代々、伝えて行くのも良き風習といえます。



子供もがんばる囃子連

獅子とお神輿

獅子もお神輿（みこし）も祭りの子供たちにはなくてはならないものといえます。

神明宮大祭では五月のはじめ、町内に子供連の会所（獅子やお神輿が置かれる小屋）が開かれます。

子供たちにとって、この日からもうお祭りが始まっているのです。

昭和三十年代ごろまでは、中学生も子供連に入っていたので、人數も多く、獅子頭をかぶるのはたいがい一番年長の者と決まっていて、小さい者たちは後をついて行くだけでした。

また、当時は他町の獅子とのけんかもしばしばあって、鼻が欠けたり、耳が片方取れたりで、まともに原型をとどめている獅子頭は少なかつたものです。

今では子供も少なくなり、小学生が主体で、女の子も入るようになつたので、けんかもなくなりました。

その昔は、やはり青年が中心になつてかつていきましたが、お囃子同様、子供に主役が移つてしましました。

昨年、ひさしぶりに元能見北によつて、大人の樽みこしが復活しました。



獅子をかぶる子供連

それでも獅子頭を持つリーダーになれなくて不満そうな子、小さい手で一生懸命に鐘を鳴らしたり、大うちわをあおぐ子、獅子がこわくてべそをかきながらもみんなの

提灯と法被

ちょう

ちん

はつ

ひ

祭りを演出する一番の立役者は提灯ではないでしょうか。

神明宮大祭にもいろいろの提灯が使われます。神明宮から東、能見通りまでの馬場先門には各町の御神燈がすらりと並びます。また、能見通りと材木町への入口の交差点には、岡崎でも指折りの大きな提灯が設置されます。

最近では少なくなっていますが、各家々の軒先にも様々にデザインされた献燈がつるされます。

夜の宮入りともなると、山車に付けられた提灯のみでなく、引き手の腰の各町の名前入りの弓張提灯にも灯がともされ、祭り気分を盛り上げます。



能見通り入口の大提灯



馬場先門の御神燈と神明宮の入口につるされた御神燈(左)



いろいろな 提 灯

長い提灯、丸い提灯、小田原提灯、弓張り提灯、……と提灯にもいろいろな種類が見られます。



山車につけられた提灯



各家の軒先につるされる提灯



会所につけられた提灯



梵天につけられた提灯

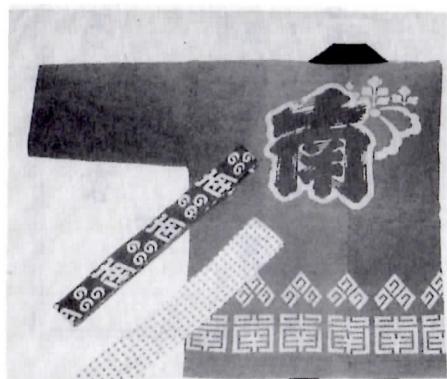
提灯にもまして祭りを彩るのが
はつびではないでしょうか。

祭りの正装として、また各町の
制服として祭りには欠かせません。
各町それぞれに、自分の町の特徴
を出そうといろいろと考えて模様
や色がデザインされています。
はつびだけでなくゆかたや着物
にも各町独自の工夫がなされてい
ます。



ハッピ姿も自慢げに山車を引く子供たち

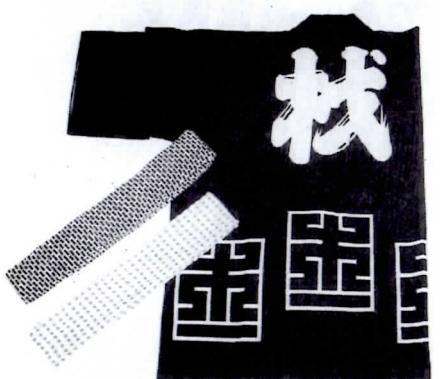
法被と提灯のデザイン (1)



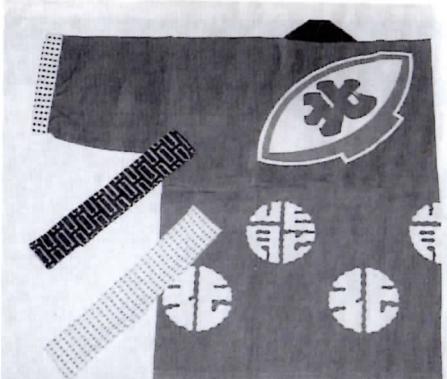
能見南之切



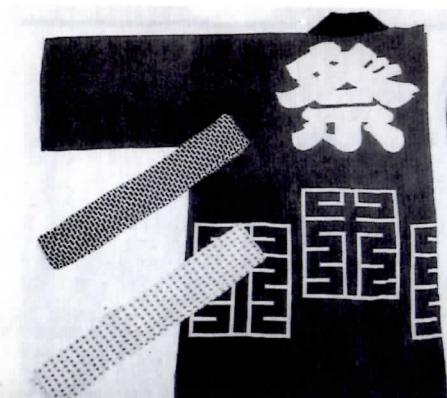
元能見北町



材木一丁目



能見北之切



材木二丁目



能見中之切

法被と提灯のデザイン (2)



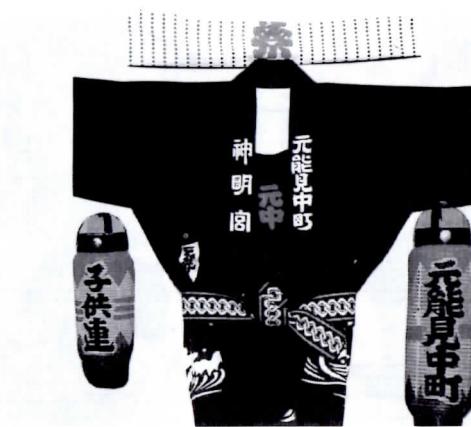
城 北



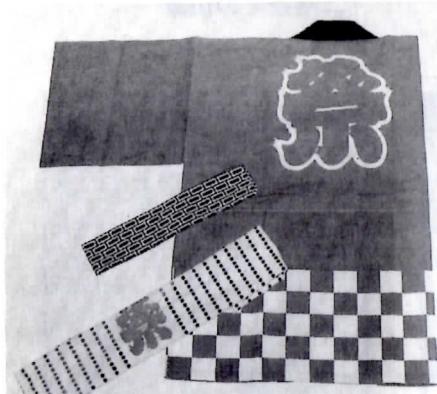
松 本



柿 田



元能見中町



末 広



元能見南町

懐かしの

神明宮大祭

(昭和三十年代の
アルバムから)



御神輿は人々によってかつがれていた



当時の踊り子たち



最後まで残っていた
二階建ての山車

ポスターのいろいろ





宮司さんも馬に乗っていました



ミコシだワッショイ

昭30・5・15の新聞より

夏祭りの幕開く
岡崎・能見の神明さん

五万石城下に
夏のおとずれ
きづける岡崎
三大祭の一つ
能見の神明
さん祭礼

第一日(十四
日)は折から
の雨に降りこ
められた形だ
ったが、本祭
のさのう十五
日は早朝から
すっかり晴れ上った絶好の祭日和
吉式床しい「みこし」渡御の神事
はじめ氏子十ヶ町内思い思いの
山車五台、花車四台が々町引きさ
はじめ市内目抜きを練り歩い
たほか、子供連、青年連のタルみ
こしもワッショイワッショイと夏
祭らしい景気を添えた。また午後
二時からは同社神樂殿で女子有志
二十組による浦安の舞、人長の舞
も奉納された。

ポスターのいろいろ



神明宮大祭

5月8日・9日



神明宮のいちねん

◎ ◎	1月1日	歳旦祭 初詣
◎ ◎ ◎	1月7日	七草かゆと蘇民蔵來の神符授与
◎ ◎ ◎	1月15日	成人式
◎	2月3日	古札焼納式 節分（豆まき）
◎ ◎ ◎ ◎ ◎	3月15日	祈年祭
◎ ◎ ◎ ◎ ◎	5月（大祭の前日）	入学祈願祭
◎ ◎ ◎ ◎ ◎	5月（大祭の前々日）	古札焼納式
◎ ◎ ◎ ◎ ◎	5月（第二日曜日）	前日祭
◎ ◎ ◎ ◎ ◎	5月（第三日曜日）	大祭
◎ ◎	2月11日	建国記念日（紀元祭）
◎ ◎	2月中旬	厄除け祭（厄年）
◎ ◎	5月（大祭の翌日）	終祭
		節分（厄年の方々）
		前日祭の花火

◎

6月30日

大祓式（夏越の祓い・茅輪くぐり）



大祓式



盆踊り

◎

8月上旬～中旬

盆踊り

◎ ◎ ◎ ◎ ◎

11月15日
12月23日
11月23日
12月29日
12月31日

七五三詣

勤労感謝の日（新嘗祭）
天皇誕生日（天長祭）

古札焼納式
大祓式

※この他、毎月15日には月並み祭が催されます。

神明宮では

○ 宮詣り・初宮詣
○ 地鎮祭・家内安全

○ 棟上げ式
○ 合格祈願

○ 進学祈願

○ 交通安全

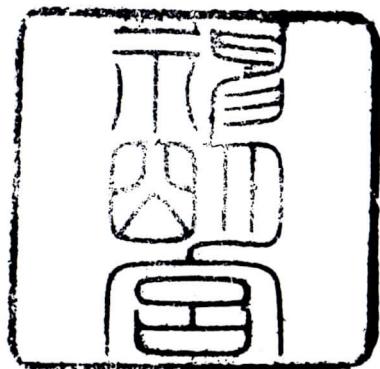
○ 危除祈願

○ 方位除祈願
など、いろいろな神事を取り行います。お気軽にご相談下さい。

岡崎市元能見町42-1

神明宮

22-6706



本冊子は元能見北町、能見北之切、能見中之切、能見南之切、材木一丁目、材木二丁目、松本、元能見中町、元能見南町、城北、柿田、末広の各町のご協力により作成することができました。

-
- 編集 「神明社の歴史」編集委員会
 - 発行 神明宮 岡崎市元能見町42-1
 - 印刷 近藤印刷(株)
 - 発行日 平成6年5月1日
-